

**いじめられる子にも原因があるんや!?**

高校時代、意識しないままに自分がいじめに加わっていたことがあった。キャンちゃんと呼ばれる(キャンサーのキャン)その男子のふでばこで所謂黴菌回しをしたり…。いつも女の子にいやみをいっては面白がっている様な子なので、それはどいやがっているとは思ってもいなかったのである。卒業前その男子からの真面目な訴えを聞きはじめて自分がやったことを恥じ入った。

最近、毎日のようにいじめが新聞やテレビで取り上げられる中、現場の教師自身によるいじめを論じる場面を見ることは少なかったように思う。大河内君の自殺事件でも教育現場は非難の的になるばかりであった。何を言っても言い訳にしかならない。しかし、現場にいるものにとっては教育評論家達のいうことはほとんどきれいにしか思えない。子ども達の間関係はもっと複雑でおとな達の社会以上にいろいろな要素が絡み合っているものであることを目の当りに見ているからである。「学校はいじめが行われていることを知っていたのか」ということが必ず問われるのだが、私はいじめのない学校などありえないと思うし私の子どもの頃からあったし大人の社会にもいじめは存在するのである。

しかし今のいじめはなぜこんなに深刻化してきたのだろう。これまでも毎年とっていいほどいじめについて指導しなければならなかった。いじめの現象について強い態度で接し、先生はいじめは許さないよ。ということを示すことでその一年はなんとかいじめのないクラスを目指すことができてきたものだ。つまり、相手の気持ちに共感し自分のやったことに罪悪感を持ち恥じ入ることでいじめっちは優しく変身できたのである。

しかし、最近「なんで僕等だけ怒るの。いじめられるほうにだって理由があるからいじめられるんや」という言葉がまかり通る様になった。毎日新聞が94年に調査した資料(小学5年から中学3年までの男女500人対象)では約40%の児童が「いじめられる人にも責任がある」と答えている。驚いたことに多くの子どもの母親或いは父親達も同じ考えを持っているのをいくつかのいじめ指導の話聞いて確信した。

暗い、気が弱い、小さい、太い、どんくさい、メガネをかけている、どもろ、不潔、タイミングが悪いなどなど「みんなと同じと思いたい人がみんなと違うものをさがして攻撃をしてくる。のがいじめの仕組みだ」とイギリスの「自分をまもる本・いじめ、もうがまんしない」の著者ローズマリー・ストーンズは子ども達に語っている。「いじめを受けている子どもに、いじめを受けるべき当然な理由はない。」と大阪府教委のいじめ指導手引書にもあるようにどんな理由があってもいじめていいということにはならないのだということはいくつかのいじめ自殺を教訓にして表面的には大多数のものの行き着いた結論ではあるが、自分の子どもが人をいじめていると認めたくない母親達はどうしても納得できない。相手に原因があるに違いない。ということになるようである。

純粹であるべき子ども達相手の気持ちを訴えられてもなおかつ自分の非を認められないという事態に追いこんでいるもの。それは文部省が推し進める管理教育であり、私立受験への過当競争であり、父親不在の家庭、不景気による就職難とストレスの原因は山ほどある。「むかつく」子ども達がストレス発散のために自分達の仲間の中からターゲットを決めいじめを行う。その点が昔のいじめとは質的に違うことであるのはみんなが同じ認識に立つところである。

**「ヘルプ ミー」を裏切らない**

これまでの指導の延長線ではいじめは解決できないという認識に立って今後いじめによる自殺といった最悪の悲劇をなくしていくために私達はいったい何ができるのであろうか。

東京総台教育センター所長の石川二郎氏は文部省のいじめの総点検について「いじめを生む原因、つまり教育のあり方はかえなくていじめをなくせと抑えなければいじめは見えない世界に隠れていく。いじめられている子のSOSがとらえにくくなる危険がある」といっている。様々な批判にさらされていじめへの指導が文部省から下ろされてきているが、いじめ事件に対する教育委員会また校長の対処は体裁合わせの書類操作や事後処理でしかないことが多い。

先にあげたいじめられる子ども達に向け書かれたイギリスの書は自分の気持ちをコントロールすることや非暴力を提唱しながら「自分をまもるかきこい方法」の第一にいじめのことを親しい大人に話すことをあげている。その中に「君が大人に助けをもとめたことが、いじめている掛こわかって、もっとひどい日があったりしないよう、ちゃんと前もって対策をたててほしい」と書いている。

私達教師はいじめの相談を子どもから直接受けたとき、あるいは父母の訴えにより知った時にどんな対処ができるのかということが問われる。マスコミはこぞっていじめた子どもへの厳しい対処を訴える。怒り狂った母親達は「相手の親御さん呼び出して話して欲しい」と訴える。実績を重視するだけの校長はいじめた子どもに直接話をしたいと申し出るかも知れない。そして、担任である自分は、どう対処することが問題解決になるのかを冷静に判断しなくてはならない。小さな判断ミスによりせつかく助けを大人達に求めた小さな命が危うくなることすらあるのである。子どもは敏感に選択している。

親に言うことが自分を守ることに結びつかないと感じたら言わないで自分一人で我慢することになる。教室での作文や日記に本当のことを書かないでいるほうが安全だと思ったら当たり障りのないことでお茶を濁す。それだけに初期のいじめへの対処が重要になる。そして、「どうして言ってくれなかったのか」ということになるのである。

「先生は休み時間廊下を回って欲しい。教室でお弁当を食べて欲しい。林間の班は先生が決めて欲しい。…」これは朝日新聞の社会欄に寄せられたいじめから不登校を経験した女子の訴えである。事件が起こってからでは遅すぎる。その前に日常的に発せられているヘルプにも耳を傾けて欲しいという切実な願いのような気がした。そういう教師集団を見、私を守ってくれるという確信が持ててはじめて子ども達はいじめの経験話しやがては「いじめ追放」の生徒会活動へと発展もしていくのではないだろうか。

子ども達が心の平静を取り戻し「いじめ」が人間として許されない行為であることを素直に認められる学校、余裕をもって教師達がいつも子どもの中にいられるような学校を実現するための運動が必要であることは言うまでもない。